

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！

養正館館長・渡辺貴斗



第2回

子どもの「心の内」を探る

◆もう空手を辞めたい！！

子供が突然「空手が嫌い！辞めたい！」と言ってきたら・・・指導者は、子どもに対して通常次のように答えるのではないのでしょうか。

A：黒帯とるまで頑張ろうよ！途中であきらめるのは良くないぞ！

B：先生の話をいつも聞いてないだろ。だからできなくて嫌になるんだよ。

C：じゃ、週2回の稽古を1回に減らしてみよう！

A～C、いずれの答えもいかにも良さそうに感じます。しかし、実は理想的な返答は次のDです。

D：へー、辞めたいんだ。ふ～ん。

A～Cのように先生に先回りして言われてしまったら、これ以上、子供は話すことがありません。「もっと頑張らないからだ」、「言うとおりにしなさい」といった指導者の指示・命令を言外から汲み取ってしまいます。

「この先生は結局、話しても分かってくれない、話さなければよかった」となり、子どもは貝のように口を閉ざし、何を言っても反応しなくなります。最後にお母さんが、「先生がいろいろおっしゃってしてくれてるよ、こら、何か言いなさい。先生、本当にすみません。それでは本日限りで辞めさせていただきます」となって、先生はガックリします。

◆コトバがそのまま本音とは限らない

では、Dのように言われたら子供はどんな反応をするでしょう。「へー、辞めたいんだ。ふ～ん」と

言われれば、「うん、もう辞めたい」と素直にしゃべりたくなります。相手の使った言葉をそのまま使うと親近感がわきます。そして、こちらから「何が、嫌なのかな？」と聞くと、例えば「道場に来るのが嫌」と答えます。「へー、道場に来るのが嫌なんだ。」とオウム返しします。そのとき、A～Cのような何か気の利いたことや、こちらの意見を言って説得しなくなります、グッと我慢です。

すると、沈黙があって、それでもこちらからは何も言わず我慢していると、「だって遊ぶ時間が無いもん」と核心に迫る第一声を放ちます。そこでこちらが表情を変えて、「空手が嫌いじゃなかったのか、良かったあ。じゃあ、こうしたら」と言いたくなりますが、引き続き同じ目線で穏やかな表情のまま「学校から帰ってきて、すぐ空手だから時間無いもん」と相槌を打つ程度にします。

すると、「だって、スイミングと空手があるでしょ。そのまえに宿題を終わらせなきゃならないし」と急にしゃべり出します。それは、「この大人は、話を聞いてくれて、僕を受け入れてくれている」と安心したからです。

◆大人の論理を押し付けない

「じゃあ、他の習い事を辞めて空手だけにしたら。」と言いたくなるのをまたグッと我慢して、「じゃあ、どうしたい？」と言うと、「でも空手もスイミングも両方好きだし、辞めたくない。でも宿題もあるし。ゲームもやりたいし。友達と約束して遊びにもいきたいし・・・」

そこで、こちらからは「でも、今のままでは、遊ぶ時間が無いね」と言うと、しばらくして「じゃあ、習い事の無い日は、すぐ宿題やって遊びに行く。習い事のある日は、習い事から帰ってから30分ゲームをやる」と自分で解決策を出してきます。子供ですから、あまり良いアイデアではないことが多いですが、こちらの意見は言わず、「それはいい考えだね」と認めると、「うん！」と笑顔で本当に実行します。後でうまくいかなければ、自分でもっと良いアイデアを出して改善していきます。人は、他人の指示・命令には従いたくありませんが、自分の考えには前向きに頑張れます。子供は皆、自分の中に答えを持っているのですが、気付いていないだけなのです。指導者は、そこに導くだけで、何か教えてあげよう、などと押し売りする必要はないのです。

◆子どもの心に入ってみる

冒頭の「空手が嫌い！辞めたい！」の“嫌い”の部分は、空手自体が“嫌い”なのではなくて、空手のせいで遊びに行けない、そんな空手が“嫌い”なのです。大人はすぐに「空手自体が嫌いなんだな」と決めつけてしまいます。

空手を辞めたいという子にじっくり話を聞いてみると、空手自体が嫌な子は1割にも満たず、ほとんどは空手以外の理由で嫌と言います。以下はよくある3大理由。

1. 道場に意地悪な子がいる、つまり人間関係。
2. お母さんが家で特訓して、家での練習が嫌。
3. 宿題、他の習い事で忙しく、遊ぶ時間が無い。

◆ある日の養正館玄関

審査直前の1週間前、幼稚園年少の白帯のT君が道場の玄関で泣いていて、なかなか入ってきません。パパはうんざりして「早く道場に入れ！」と怒鳴りだします。

そろそろこちらの出番かな？と思い、清美先生が「こちらにお任せください」と、泣いているT君を抱っこして道場に入れます。そのあと、子供の話じっくり聞く事で5分後にはニコニコ稽古に参加して無事、問題解決。本音を聞き出すと、ママが家でピンアン二段を特訓していたのが嫌で、空手自体は好きとのこと。翌朝、稽古で何があったかママに以下のようにメールで報告しました。

お母さんへ

昨日は、T君のことについて、時間が無くてしっかり話ができませんでしたが、以下が清美先生とT君のやりとりです。

「空手、嫌なの？」
「うん、空手嫌い」
「空手の何が嫌い？」
「ピンアン二段」
「おうちでピンアン二段特訓してるの？」
「うん」



道場に来るのが嫌になった理由・悩みのタネ・邪魔するモノを取り除いてあげると、一瞬で楽しくなる。

子供はうまく説明できないので、ひとまず「辞めたい」と言いますが、実際は、理由は違うところにあることが多いのです。

これまで、当道場でも多くの子が「辞めたい」と言ってきましたが、本当の理由を聞き出し、空手以外の部分にあった問題を解決する方法にしてから、辞める子も激減し今では300人の子ども達が楽しく養正館に通い続けています。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。
7歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。東大大学院博士号を取得し、東大に研究者として勤務。後、先代が病気となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。持ち前の研究魂から道場経営でも創意工夫の結果、一道場で300名と大躍進。



日本空手道鴻志会空手道場養正館

「じゃあ、ピンアン二段の特訓やめようか？」
(びっくりしたT君)「うん、やめる」
「道場の練習は？」
「道場の練習は楽しい。でも、なんでピンアン二段をやらなきゃいけないの？」
「2月の審査を受けて黄色帯になるためだよ」
「ふう〜ん」
「じゃあ無理しないで、今回はやめて次の審査にする？」
「うん！ それならいい」
「じゃあ、次も道場に来てね」
「何で来なきゃいけないの」
「先生がTに会いたいのだからだよ」
「うん、わかった」
と泣き止み、笑顔になりました。
そのあとは、いつもの通りにニコニコ稽古して、ピンアン二段をできていない子におせっかいに教えたりまでしていました。

以上がメールの内容です。実はこの話にはオチがあって、結局、T君は「やっぱり審査を受ける」と自分から言い出し、空手を辞めるところか審査も受けたのです。